

特別インタビュー前編

森岡貞香氏に聞く
葛原妙子

—「葛原妙子と世界」の連載を終えて—



聞き手・川野里子

二〇〇六年四月十四日

於・森岡邸

◇「女人短歌会」創立で出会う

川野「『葛原妙子と世界』を書いてゆく中で浮かび上がってきたのが、葛原の大変おもしろい人間像とその時代です。森岡さんは同時代を生きてこられ、また葛原の生涯の盟友でおられました。是非お話をうかがいたいと思います。

きょうはまず、戦後の雰囲気からうかがいたいと思います。葛原は特に戦中から戦後にかけてすごく大きな変化がありましたね。

森岡「正直言って私、葛原さんが戦前、「潮音」に出していた歌を見たことがないの、全然。でも戦後になってあの人は変わったと思いますね。やはり一つは、昭和二十四年に「女人短歌」ができたことでしょう。あの方は「潮音」から入ってらした。四賀光子さんがお入りになったからなのね。「潮音」は大きいし女流がたくさんいたので、初めての会合のとき地方の方はお出ましになれなかったけれど、一度に十人くらい入られたと思う。将来性がある、いい方が入られた。

昭和二十四年は、戦後四年目ですよ、銀座のオリンピックク（という店）で、五島美代子、北見志保子、そういう方たちが発起人になって最初の総会が開かれたんです。四賀さんは顧問みたいになるとおっしゃって発起人にはならな

かった。そのとき会員の中で一番年齢が若かったのは私だった。ほとんどが明治生まれの人です。大体、下相談ができていたんでしょうね。私には訳がわからなかったけれど、女人短歌会の雑誌を出そうということで話が進み、残れる方だけ懇親会にお残りくださいということで、私は家がわりあい近かったので何となく残ったんです。大きなテーブルに座ったら、私の正面が葛原さんだった。そこへずらーっと「潮音」の人が並んでいた。「潮音」はすっかり横の連携をとっているように見えたけれど。そのときは葛原さんが「潮音」全体のリーダーシップをとっていましたね。「潮音」ではどうだったか、私は雑誌を見てないからわからないけれど、そこにいたのは、そういうのに参加しようという方だから「潮音」の主だった方だったと思います。みんなで打ち合わせ、発言するのは葛原さんでした。

印象的だったのは、発起人の方たちが「雑誌を出したい。それについては編集委員を決めたい」と言われたのです。北見さん、五島さん、川上小夜子さん、阿部静枝さん、生方たつゑさんの名があげられました。私は、会としての雑誌が出るなんてことを知らないで行ったのです。そうしたら、「潮音」の方たちがざわざわと相談してらしたようだったけれど、葛原さんがすっと立たれた。背が高ーい方。そのときはまだ、頭のてっぺんがあんなに高くなかったの。ちよっと上がっていたけれど。そして、「ちよっとおうか

がいたします。私どもは「潮音」から参りました。この会で歌誌を出すというけれど、それは選をなさるんですか。歌はそのまま載せるのですか」とお聞きになったら、（発起人の方から）「全員の歌をそのまま載せるというわけにはまいりませんわね」とお返事があつた。そうしたら葛原さんは「私どもは四賀光子先生の選を受けている者です。皆様たちの選を受ける気は毛頭ございません。それをご承知おきいただきたい」と言ったんです。

川野——意外な印象があるかもしれませんが、葛原は「潮音」という結社の中で優等生として育ってきたようですね。西洋詩のイメージとか外の世界のイメージが強いけれど、「潮音」の中でかなり一生懸命の人でしたね。

森岡——そうなんです。余談になりますが、後に葛原さんに「女人短歌」の創刊のころ、あなたはあのくらの歌人になろうと目指していた人があつたの」と聞いたら、「あつた。倉地与年子さん」と言うんです。でも、結社は「潮音」だけじゃない、もっといろいろな人がいるのではないのと私が言っても、葛原さんは「いいえ、倉地さんはすばらしい。私は、ずうっと、倉地さんを越えたい、越えたい、葛原妙子は倉地さんを越えろと自分に言い聞かせてきたのよ」って。その会するとき、倉地さんは東京でなかったから見えてなかったんです。でも、あの人は倉地さんの上に行きたいということで、倉地さんの歌は目標だったん



森岡貞香 氏

です。

川野——あの当時の記事を見ると、倉地さんを自分の別荘に誘ってみましたり、方法論について議論してお互いに励まし合ってますね。倉地さんは戦後、ご主人を亡くされ、工場で働かれたりして逆境にいらしたようで、そんな歌をたくさん詠まれています。葛原さんのほうは勉強ができた戦後、二人には大きな別れ道があったみたいですよ。

◇『白蛾』が出るころのこと

森岡——飛びますが、『白蛾』が昭和二十八年に出たですよ。その少し前に、五島さんの『風』をはじめに、主だ

った方たちの歌集が十何冊、女人短歌叢書として長谷川書房から一気に出たんです。その合同出版記念会には歌壇のお歴々をお呼びして、それは盛大な会でした。そのとき、森岡さんも歌集を出さないかと言われたんです。でも、私は自分の療養とか、主人が亡くなってましたから今後のこととかを考えるだけでいっぱい、歌集なんて考えたこともなかったんです。ですから、お断りしたんです。でも、『女人短歌』の（創刊号に私の歌が巻頭の見開きに出ているから、「やはりここに加わってくださらないと格好が悪い。お金がなければ無尽講のようなのをして、これからお金のない人が歌集を出すという方法も考えるからどうですか」と皆さんがおっしゃった。だけど、私はお断りしました。でも、それが後に自費ではなく『白蛾』が第二書房から出ることになったのです。

自分のことになって恐縮ですが、戦前、私は「ポトナム」にいましたが、歌なんて出したり出さなかったり。ですから、子供を身ごもっていたときのこと、赤ちゃんのときの歌なんて一首もないんです。終戦間際のころの子供の歌が一首くらいあるとは思いますが、本気で歌をという気は全然なかったんです。ところが戦争中、戦地から「たまには歌を書いて寄越すように。せっかく歌をやるんなら歌集の一つも出せるように」なんて、夫の手紙がときどき来るんです。そして自分の歌を二、三首、書いてある。それ

が上手なんです。だからよけいにその気になれなくて、私は送らなかつた。戦後になってそれを思い出してね。今は切羽詰まつた生活だけれど、歌に心をやることでいくらか自分の気持ちがいさなかりするのなら、やってみるかなあという気になったんです。夫が亡くなつてから後のことよ。

川野——戦後の女性歌人たちの圧縮されたエネルギーがグーッと噴き出したような時期だということを私は感じました。「白蛾」が典型的にそうですね。それは実感としてありでしたか。

森岡——いいえ。というのは、「ボトナム」の歌会には一回も出たことがない。しつかり自分の歌をうたうという覚悟で作つた歌がないわけです。そして、終戦になつたでしょう。だから、終戦の歌もないんです。でも、夫が亡なつてから何か頼るものがほしい。自分の身を投げ込んで歌でも作ってみるかと思つて本気になつた。そして、最初に蛾の歌を作つた。私は昭和十八年から二十二年まで幼い息子と東京から出て、逗子に来ていました。蛾が大発生したの。山沿いの海岸に行くまでの狭いところに家があつたのですから、夜、ものすごくたくさんの蛾が入ってくるの。夫が亡くなつたのが四月で、その夏。気持ち悪いってらないの。朝、おなかの大きい蛾がたくさん死んでゐるんです。ああ、いやだと思つてね。私は胸の病氣の方も調子がおかしくなるし、もう結核だとわかつてました。(戦

後の経済政策の一つで貯金の) お金は全部封鎖されましたから、きりきりしか出せない。脱出口を求めたようなところで歌との巡り会いがあつたわけです。蛾がバタバタしているのを見ると自分の無様さを見ているようですね。大きい蛾の感じは女の人がバタバタしている感じとイメージが重なつたんですね。それで歌つた歌です。そうしたら、その歌を新しく創刊された「新日光」という歌誌の二号に載せてくださった。編集の方が逗子に居られた御縁で載せてくださったの。

◇「赤光」と「白蛾」に惚れ込む葛原

川野——あの当時、夫を亡くした女性たちがたくさんいました。二十八万人というから、現在の京都市全部の人口にあたります。それだけの女性が寡婦になつた。森岡さんはそういう女性たちの象徴的な存在になつていかれましたね。

森岡——私はそんな気は毛頭なかつたのに。初めは第二書房の方で歌集を出したいと言つてこられたから、私はそんな気もないし、費用もありません。「女人短歌」からのお話もお断りしたくらいですと言つたんです。でも、入院した病院に二度まで訪ねていらして、どうしてもうちで出したいとおっしゃる。それも、自費出版ではなくて、という話で。退院してからそういうことで出るようになりました。

「白蛾」は思いがけなく一般書店で売れたのでした。「白蛾」を読んだ葛原妙子さんが「女人短歌」で皆さんの歌を見ていたけれど、私が相手とするのはあなたです。あなたと仲良しになって、やっていきたいと思います」と自分勝手に、なんかプロポーズみたいにおっしゃった（笑）。

川野——多分そのころだと思うのですが、「潮音」に出した葛原も蛾の歌を作っているんです。森岡さんの歌に刺激を受けたのだろうと思うんですね。だから心底、森岡さんに惚れて追っかけてたんじゃないですか。

森岡——私もびっくりしちゃったんです。葛原さんという人はよく知らないし。でも、あれは堂々としたプロポーズですよ。あの人は「森岡さん、森岡さん」って言いながら、一方的に決めちゃうという強引なところがある。「をがたま」を出したときもそうですけれど。自分の考えたことに對しては貪欲な方だった。理解を得てゆつくりやるという人ではないんです。ご主人様にも、歌をやりたいからこうこうなんて言わないでしょ。そうしてのめり込んでいったものだから、ひどく衝突があったのです。

川野——昼夜逆転の生活で、夜は起きて歌を作り、昼間はずっと寝ていたという話もありますね。

森岡——そうですね。うちに電話がかかるのが夜中でもの。そして、「森岡さん、茂吉の歌はいいわねえ」と言つて、独特のハスキーな声で、「鶴のあたまは悲しきものを

」なんて大きな声で朗唱するから、おかしいでしょ。それもあの人は「赤光」がほとんどですよ。晩年の「小園」などの歌はあまり言ったことがないですね。「赤光」。

川野——そこがどうしてもなと思つたんです。連載の最終回に書いたのですが、葛原は「赤光」「あらたま」あたりを継ごうとしたという感じがするのです。森岡さんと二人で「茂吉をこつちに取つてしまおう」と話し合つたそうですが、それはどういう話ですか。

森岡——何だか知らないけれどそう言いましたね。「アララギ」なんか茂吉をよく理解してないのよ。だれも理解してないところを私たちは理解して、二人で茂吉を取つちやおう」って、何遍も言いましたね。それもほとんど「赤光」なのよ、めあては。「鶴のあたまは悲しきものを」と言われても、おもしろい歌だとは思うけれど、茂吉の歌は「赤光」だけではないですよ。だけど、あの人は「赤光」。

川野——そこが葛原の歌の礎、基礎になつていったところがありますね。

森岡——そうですね。でも、だからといって真似してはいけなから、そこから発進してきているんです。出発点、スタートをそこへとっている。もう、最後まで「赤光」でしたよ。

川野——でも、茂吉自身は「赤光」をどこかで捨てましたね。別の道を行きました。



川野里子 氏

森岡——『赤光』は）自分の若気の至りみたいなどころもあることは認めているところもあるでしょう。ところが、葛原さんは『赤光』。

川野——女であるということと『赤光』を継ぐということがどこかでバチッと出会った瞬間があったような気がするのです。森岡さんが『白蛾』で、苦しむ蛾を見て、戦後の自分の心をぐーっと投影していったことと、葛原が『赤光』と出会って行く部分と何かすべて重なって来るような感じがするんです。

森岡——そうですかねえ。私もよくわからない。だけど、葛原さんが『白蛾』に惚れ込んだことは確かなの。でもね、私の第二歌集の『未知』も彼女は氣に入っていましたね。

あの人があんなことを言ってこなかったら友達にはならなかったと思いますね。私は私で一人歩きをしたと思うんです。だけど、もう貪欲だったの。うっかりするとパツと取られちゃうのよ、「あ、それ、おもしろそうだ。私が歌う」って。でも、その歌の註を頼まれたときは困った。だから、デタラメ。あの人の自註で本当のことを書いたのはきびしく言えば一つありません。

川野——それ、おもしろいなと思ったんです。（他界より眺めてあらばしづかなるのとなるべきゆふぐれの水）の歌は、フライパンにあいた穴から向こう側を透かしてみて作ったという話もうソミたいですね。

森岡——〇〇パーセント、ウソよ。そんなバカなこと、あり得ないでしょ。私、あのととき言ったの、「いくら何でもあなたひどいじゃないの」って。「悪い？」と聞き返すから、「よくない」と言い返すと、「私の歌は私の歌です。あなたの歌じゃないんですから、私の勝手」って。

川野——葛原は人が褒めてくれたり書いてくれたりすると、それに乗っかるかたちで自分の歌についてどんどん話を作っていきますね。それも葛原の創造性としておもしろいと思うんです。

◇五島美代子との交遊

川野——空堀の酔の歌、〈飲食おけいじきののちに立つなる空堀のし
ばしは遠き泪の如し〉を作ったときのお話をうかがえま
すか。

森岡——あれなんかはウソじゃないのよ。夏、葛原さんが
どうしても軽井沢の自分の家へ遊びに来いと言うんです。
息子さんも一緒に熱心に勧めてくださったものだから、
高校一年の息子を連れて行っただけです。これは最初に行っ
たときのことですよ。その年は、東大の一年生になったご
長男とそのお友達、それに聖心大学に行つてらっしゃる二
人の娘、妙子さんの五人。長女の方はもう結婚していまし
たから別です。とにかく、その夏は全部で七人でワアワア
と過ごしていたんです。

何日目だったかしら、みんなで森の中を散歩をしていた
ら、西洋の油絵にでも出てきそうな白いレースの長いお洋
服を着て日傘を差した女の人が歩いてくるんです。よく見
ると、あと二人、女の人がいるわけ。葛原さんはじっと
見ていた。あの人はひどい近眼で、メガネを外したら何も
見えないくらい。私が「五島美代子さんに似ているけれど
まさかねえ」と言つて、近づいてみたら、五島さんとお嬢
さんとお弟子さんだった。一、二日前から、そのお弟子さ
んの別荘に來ているんですって。「まあ、うれしいわ、こ

こで葛原さんと森岡さんに会えるなんて」ということで一
緒に散歩をしていたら、突然、「私、葛原さんの別荘に行
くわ」とおっしゃるから、葛原さんはびっくりしちゃつて
ね。お布団の用意もしなきゃいけないし、当時はまだ食糧
が十分じゃないし。でも、「行くわ」と言つたら、もうそ
れで決まり。お弟子さんには帰つてもらつて、五島さんと
いづみさんはそのまま葛原さんの別荘に來てしまったの。

別荘では、五島さんのお嬢ちゃんのいづみさんは御持参
のレース編み。私たちはベチャクチャおしゃべりしてい
るし、男の子三人は知らん顔で別の部屋。葛原家の二人のお
嬢さんが賄い婦みたいに立ち働いて食事の用意をしてら
した。ジャガイモを買つて、つぶして、シャケ缶を出して、
一緒に混ぜて。大したものはないですよ、というわけ。
そうしたら五島さん、「あたし、こういうのが食べたかつ
たの」なんて、お嬢ちゃんみたいな声を出して言うの。
(葛原さんのお嬢さんたちは皆さんの食事の支度で) 大変
だから、お醤油だつてお酢だつて堀のまま、ハイッと出す
んです。食事の後も大変ですよ。二人のお嬢さんが立ち働
いたの。片付けも何も手が回らないから堀を出しつ放しに
していたら、夕方になって日が堀に射して來た。ああ、い
いわねえと言つてたんです。その時の歌。

川野——軽井沢の家に葛原が突然、窓を作ったという話が
ありますね。

森岡——もしそこが空いていて見ると好い樹が遠くに見えるてくるんですって。それを見なくちゃと言って、二階への階段を上がった突き当りのところが壁になっていのですけれど、そこを四角く切っちゃったの。違い棚のところも切っちゃった。そうしたら、(大工さんが)「奥さん、これ以上切ったら家が壊れます」って(笑)。二階を建て増ししておいて、あっちだ、こっちだと窓をあけちゃうんだから。でもこのことはだいぶ後のことです。

川野——「空堀」の歌のときでしょうか。五島美代子と葛原と森岡さんとで歩いていたとき、五島美代子が突然、別荘地を買ったという話があるそうですが。

森岡——五島美代子さんとお嬢さんが突然加わって、みんなで二、三日暮らしていたら、五島さんが「私、軽井沢に土地を買って別荘を建てるわ」と言い出してね。すっかり乗り気になっていて「葛原さん、土地の周旋屋さんを探してちょうだい」と言うの。私が「土地を買うのはいいけれどもお金はどうなるの」と聞いたたら、「お金なんて大したことはないわ。私、払う。だって朝日の選歌料がありますわよ」って。朝日歌壇の選歌が始まった年だったんです。五島さん、近藤さん、宮柊二さんとの三人。それが思わぬ高い選歌料だったんですって。「え、そんなに!」と葛原妙子と二人でびっくり仰天したくらい。それで業者(西武)に頼んだら、葛原さんの別荘よりもうちよっと駅に近いと

ころの横の山を開発したところがあって、その隅が残っていた。端っこが傾斜地になっていて、全体で百三十坪くらいあるけれど平地は五、六十坪くらいしかないんです。見に行ったら、小松がポツポツと生えているだけ。周りに家はまだ一軒も建っていない。ただ山並みが見える。そこへ入って行って五島さんはしばらくじーっとしていた。で、「買う!」って言うの。「でも、あなた、五島茂さんに言わなきゃ」と言っても、「いいです。私のお金ですから」なんて言って、すぐに業者(西武)と交渉して買うことにしたのです。

川野——わあ、すごいなあ。私が思い切って買えるのって、スキヤキの肉くらいですよ。あのころの女流はすごくエネルギーがありますね(笑)。

森岡——五島さんはお金がないからと言って、最初に建てたのは台所とお手洗いとたった一間の家。それも広い部屋じゃない。六畳くらいあったかな。玄関も何もない。お堂みたいな家でしたよ。窓もろくにできないうちに行ってみたら、アブだかハチだかがブンブンお部屋の中を飛んでいて入れない(笑)。それからだんだん建て増しをなさったんだけれど。あそこを買ったそもそもはたった二日ばかりのおしゃべりからなのよ。

◇秘密の場所「あそこ」

森岡——その翌年、葛原さんと二人で変なところに行ったの。軽井沢の星野温泉の奥。前は硫黄を採っていた車が通っていた道だったらしい。だけど、その当時はもう硫黄を採ってなくて、通る人もない寂しい山道だった。崖の下を谷川が流れていて美しいところが見えたのです。私は身軽だったから木を伝いながら降りていったら、その下がすばらしいところだった。彼女は「森岡さん、危ない、危ない」って言ってたけれど、もうたまりかねて、危ないのにズルズルッと滑って降りてきた。谷底のそこは水が流れていて、中洲もあるので水が二手に分かれるの。この中洲に草だか蔦だかいろいろ生えているんです。そこに二人で二時間くらいいたの。「原牛」の「かのひとりご目ひらくごとき藻の花の小さきに白きに悲傷せり」という歌を作ったのもここ。

川野——その歌は論じる人が多くて、いろいろ言われていますけれど。

森岡——何しろそこが気に入ったんです。すごい気に入ったよね。そのときの歌はたくさんあるの。その翌年、「森岡さん、私ひとりであそこに行ってきた」と言っていました。「あそこ」と言えばそのことなのよ。そこが彼女にとって秘密の場所なの。あの人は二回か三回、行って

るわね。私は「また行つたの、あんなところへ」と言つたけど、「あそこ」にはあの人の心を描すぶるものがあるのね。でも、なるほどなと思いました。なぜこんなところが心を描すぶるのか、私にはわかるのですが、それを言うといけないわ。

川野——そこをうかがってみたいですね（笑）。

森岡——今、あそこがどうなっているか、行ってみたいわね。でも、道も変わったし、ちよつとわからないでしょう。あの人は架空からは作らない人なの。お話とか一つの絵を見て、そこから連想するということはある。だけど元の根っこはある。全くの無からは絶対に作らない人ですよ。「葡萄木立」（昭38）のときだって、わざわざ甲州に一人で行くのよ。そして、葡萄園を歩いてきて作つたわね。「葡萄売り」なんてところも本当に行つて、作つたの。無からは歌わない。

川野——そういう意味で葛原の歌を写実だという人もありますね。白いミミズクを飼っていたという歌がありますね。あれもミミズクを見て、その歌を作るためにわざわざ飼っていたのですか。

森岡——そうですね。気に入って気に入って、電話がかかるとフクロウのことを話すの。小さいフクロウで、高雅な顔をしていると言うのよ。部屋で放し飼いだから、足にくさりをつけておくの。鳥のひき肉を人差し指の先くらいに

丸めて、手にちよつと載せて見せてやるとパクツと食べる
つて。毎日毎日フクロウのことで電話がかかつてきていた
のですけど、そのうちにかからなくなつた。それがもうす
ごいことになっていたのです。あまり運動もさせないでし
よ。体力が弱つてきて、羽根が抜けたりするので、これは

大変だといふので、売つていた鳥屋に聞いたら「やはり生
き餌が欲しいんですよ。ハツカネズミがいい」と言われた
んですつて。それでハツカネズミを買つてきて与えたら、
パクツと一口で食べて陶然とした目をしていふと言ふのよ。
フクロウは元氣になつたんですつて。でも、それから先が
大変だつた。今度はひき肉をやつても食べないでしよ。毎
日ハツカネズミを食べさせなきゃならなくなつた。それで、
フクロウに食べさせるためにハツカネズミを飼つたんです
つて。ハツカネズミつて、子供を生んでどんどん増えるで
しよ。フクロウはもう食欲になるし。すっかり気持ちが悪
くなつて、フクロウは無理矢理、鳥屋に引き取つてもらつ
た。よほど後味が悪かつたらしく、「もうこりこりした」
と言つてました。

川野——壁の隙間にネズミが走るといふ歌など、ネズミの
歌もずいぶんありますね。部屋でハツカネズミを飼つてい
たんですか。

森岡——そうでしよ、きつと。フクロウを飼ひ始めた最初
のころは「ちよつと頭を垂れていて、手に乗るのよ。何と

も言えない感じだわ。すばらしい」つて言つてたのが、
「気持ちが悪い、気持ちが悪い」で恐れて、ノイローゼに
なるほど怖くなつちやつた。あまり大きなフクロウじゃな
かつたのに。でも、そのフクロウを捨てたといふ歌は作つ
てないの（笑）。

川野——ミミズクといふために生活が夜型になつたといふ
話も聞いたのですが。

森岡——そんなことはないですよ。

◇蛇がとぐろを巻いているような

川野——「私は書きますから」といふことで葛原が別室に
籠もつてしまつたといふエピソードも、軽井沢にいらした
ころではなかつたでしょうか。

森岡——そう。あれは中城ふみ子が亡くなつた後のことで
すね。軽井沢にいたときに、彼女はその文章だか歌集の批
評だかを頼まれた。あのときは五島さんが帰つた後で、
「森岡さん、今から私は書きます。あの四畳半の男どもを
出しちゃつて、あそこに籠もります。入つてきてはいや
よ」と言うから、私は一日だと思つてたの。そうしたら一
日たつても二日たつても出てこない。ご飯はその部屋へ持
つてこさせて、本人は一切出てこない。三日目にそうつと
覗いてみたら、部屋の真ん中に派手な掻巻が一つあつて、

こんもりとしている。まるで蛇がとぐろを巻いているみたいな。葛原さんの姿は見えない。死んでるんじゃないかってびっくりしたわねえ。「入るな」と言われていたことを忘れちゃって、「あらっ、葛原さん、妙子さん」って大きな声で呼んだの。そうしたらその掻巻からヒョット首を出し、「入っちゃダメって言ったでしょ」と恐い顔で言って、さんばらの頭で、また掻巻かぶってそのまま出てこなかったの。何をそんなに必死になって書いていたのかな。

川野——葛原は苦吟するタイプの歌人ですが、書くほうもすごく苦労したみたいですね。

森岡——もうとにかく、あの人は添削を一つするんでも準備が要る。講演なんか頼まれてごらんなさい。葛原さんは全部原稿を書きますよ。そうしてそれを見ながらしゃべる私、「あなたたったら、講演のとき偉そうに原稿を読んでいるわね」と言ったことがあるんです。「森岡さんみたくに器用にいかないもの。私はちゃんと原稿を書いておかないと言えぬ人間でございますッ」なんて（笑）。新人の歌集の一首の批評だって、すぐにはできないと言うの。前もって原稿用紙に書いておく。そうしなければしないの。

現代歌人協会で添削の講座をしたとき、葛原さんも担当したの。あらかじめ五首くらい渡されていたから、しゃべ

ることを妙子さんは全部原稿用紙に書いておいた。ところが、その日、遅れてきた人がいて、「どうしても見ていただきたい。一首、お願いします」と言って、受付をしていた私に出したんです。だから、総指揮をしていた加藤克巳さんに断って葛原さんのところに持って行き、「今日、来た人のだけど、最後に一首、付け加えてください」と言ったら、あの人、顔色を変えたわね。「お断りします」って。「たった一首でしょ。一言何かを言えればいいんだからお願いします」と言っても、憤然として「私は不器用でございます。ですから、とつさに言われてもできません」って言うの。作品を出した当人は席で待っているのよ。困っちゃってね。私が「あなたも歌を作っている人でしょ。一首くらい、何よ」と言ったら、「私は前以て原稿用紙に書いておかなければ喋れないんですよーすッ！」って（大きな声で）言うから、加藤さんはびっくりしちゃってね（笑）。「森岡さん、どうしたんだ、葛原は。この一首くらい、何でもいから何か言ってやればいいのに」と言うんだけど、私は「そんなこと言ったって、あの人に通じないわ」で、葛原さんはとうとうしなかった。加藤さんはそれからもう葛原さんのこと、忌避するわね（笑）。でも、男の歌人にはちょっとしたこと忌避されるのは多いのよ。

特別インタビュー後編

森岡貞香氏に聞く

葛原妙子

—「葛原妙子と世界」の連載を終えて

聞き手・川野里子

二〇〇六年四月十四日

於・森岡邸

◇女同士で読み合い深め合う

川野「『女人短歌』のことにもつながるのですが、今から考えられないくらい、「女人短歌」の創刊の頃の男の人たちの反応はすごいものがありましたね。あの雰囲気のかでどうして皆さんは「女人短歌」を続けようという気になったんですか。

森岡——やはり男中心の歌壇だったから、女同士、固まっ
てなきやというわけ。大西民子さん、富小路禎子さん、北
沢郁子さん、みんな入ったの。大西さんは木俣修さんが反
対されたのでペンネームで入ったと思う。先頃、調べたけ

れど大西さんの歌がない。しかし、会員名簿にはあるのよ。
（だから、ペンネームを使っていたということでしょう）
富小路さんはだれの紹介もなしに、最初は投稿欄に投稿し、
それから会員になったんです。北沢さんはちよつと遅れて、
最初から会員として入会。そして、女人短歌叢書で、みん
なが合同して既刊の歌集を出したことがあるんです。大西
さんも歌集は会員で入っていると思う。でもね、後日、み
な「女人短歌」から離れました。

私は、女人短歌の中で有名になりたいとか、そんな目的
がなかった。私は自分とぶつかり合って、自分の杖とも柱
ともするつもりで歌をやっていたでしょう。手術しても病
果が残るから完全には治らないけれど、子供が一人前にな
るまでは絶対死にたくないと思った。どんなことがあつて
も。ボロボロになつてもいい、子供が成人して就職するま
での命をどうやって保つかというとき、杖か柱になるもの
が欲しいわけですよ。だから、歌に心をやつたわけ。ただ、
歌をやるといつても技術も要るし、定型という規則がある
わけだから難しいですよ。でも、他人が何と言おうと自分
なりのふうで歌っていく。それが認められるとか認められ
ないとか、そういうことは問題じゃなくて、自分のために
そうすることで生き抜けるのではないかという感じだった
の。だから、すごく強かったわけ。

葛原さんとは「仲良しでやっていこう。先輩のおばさん

たちに勝つには仲良しもなくちゃいけない」と言っていた。「組むにはあなたしかありません。見渡したところ、森岡貞香でーすッ。これから勉強していくのにだれがライバルであり友達であるかと考えたら、やっぱりあなたただわね」なんて、言ったのよ。

川野——あの当時、女流が書く場も少ないとき、五島、葛原、森岡さん、もう二、三人で、お互いについてよく書き合ってますね。今読んでみると理解の深さが男の人たちが説んだときと違います。

森岡——難解派と言われて棚上げでした。塚本邦雄も難解派でした。

川野——森岡さんが葛原のことを「ガラスのケースの中に入って苦悶する魂のようなものが見える」という言い方をされています。表層的に女歌だ何だと叩かれていたとき、森岡さんがいちばん先にいちばん深いところを掴んでおられたなあと思います。中城ふみ子が亡くなったとき、スキヤンダラスな部分が表層的なところで話題になったけれど、そうではない、ああいうふうなことも一つの社会詠だという言い方を葛原はしています。森岡さんも含めて女同士で読み合うことによって深め合っていた部分が大きいのではないですか。

森岡——葛原さんって途方もないようなところがあったの。ただ、そういう方が横にいらして刺激になったことは確か。

だけど、私の歌と葛原さんの歌は基盤が違う。あの方はお医者さんの奥さんですし、病気でもないし、経済的にも心配がないでしょう。私は当時、家もあるし父も母も生きていたけれど、将来どうなるかはわからなかった。病気がかなりひどかったので、母なんか私がすっかり死ぬものと思ってた。自分の命を自分で支えるには精神的に何かなければ、弱気になってはだめなんです。そこを歌に求めたから、いい歌とかではなくて体当たりのところがあって、言葉なんかも自分なりに考えてずいぶん無理して使いました。

◇室生犀星へ接近

川野——昭和二十三年代、ジャンルを越えた議論が盛んでした。短歌も俳句や詩に接近して、短歌の間口を広げようという時代だったことは影響しているんですか。

森岡——それは私、全然わからない。だけど、『未知』という歌集は詩的なところがあると言って、ユリイカ社の伊達さんは認めてくれたんです。伊達さんはその後、ガンで急逝されました。短歌はいわゆる詩的にならないほうがいいと自覚したのは逆に『未知』を刊行したことからですね。川野——葛原も詩のほうに接近しようとした時期があったんですか。

森岡——私はないと思う。あの人はあくまで短歌でしたね。

川野——見方によれば葛原の歌はずいぶん詩のほうに近いのではないかということも言えなくはないですね。

森岡——でも、あの人は詩をやるうと言ったことは一回もないわね。

川野——葛原は室生犀星と親しかったそうですが。

森岡——室生犀星の奥様だったと思うけれど、葛原さんの病院へ患者としていらしていたことがあるというので、詩とかそういう関係からじゃないの。おうちも近かったみたいよ、大森で。

川野——何が行き来があつたような。

森岡——彼女はそういうことを言っていたけれど、それほどないのよ。

川野——「女人短歌」で一度、室生犀星を呼んで座談会が開かれたことがありましたね。

森岡——ええ、しましたよ。そのときに名乗り出たのが葛原さんで、「私は（室生犀星を）知っている。私が交渉する」と買つて出たんです。それで「葛原病院の案内です」と言つて、交渉をしたの。旧軽に室生さんの立派な別荘があるから、そこへ行くことになった。「森岡さん、あなたも来るのよ」と言われたけれど、私は用事もあつたし体の調子もよくなかつたので、「行かない」と言つたら怒つてね。さんざん誘われたけれど、とうとう行きませんでした。それで、生方さん、五島さん、葛原さんなどで軽井沢に集

つて車で行ったら、案内人の葛原さん、（道が）わからなくなつちやつた。ぐるぐる回つて、お約束の時間が来てもまだ着かない。しょうがない、ここで車を降りましようと思ふんで決めたら、五島さんが「腹が減つては戦ができません」と言うから、私はここにいます」と言つて、手提げの中からアンパンを出して食べ出したんですつて。葛原さんが東京に帰つて来てから感心してましたね、「やつぱり五島さんは大したものね、一人で車に残つてアンパンを食べてるなんて」と。ところで、葛原さんが車から降りてみたら、そこが室生さんの家の前だったんですつて（笑）。

川野——わあ、すごいなあ。あの座談会は葛原の独演会みたいになつたとか。

◇第一歌集「橙黄」の改変

川野——「原牛」（昭34）の叙文を室生犀星が書いていますね。

森岡——「女人短歌」のことでおたずねして以来のことでお知り合ひだからつてことで。でも「原牛」は室生さんは「和歌の體位」ということで書いていらして、良い歌集として認めていらつしゃいます。

川野——「橙黄」（昭25）から「飛行」へ、方法的にずいぶん飛躍がありますね。どんな苦しみ方をしたんでしょか？「飛行」誕生の裏話など、お聞かせいただけませんか。森岡——飛躍があるんですよ、いろいろなことがあったから。私と知り合ったことも一つ。それから、「女人短歌」に行ってみたら「潮音」と違う世界があったわけ。五島さんの歌はもちろん（葛原とは）違うんですよ。あの人はお子さんの歌を詠んでいて、歌い方も何も全然違うけれど、ひたすらな歌なの。だから、五島さんの歌を妙子さんは認めていましたね。あの人の目では、私の「白蛾」と五島さんの歌。そのときは本当にそう思ったらしくて、「だからあなたとこれからおつきあいしたいわ」と向こうからプロポーズしてきたんです。

川野——「飛行」の帯文を頼むほど森岡さんに傾倒していたのですね。

森岡——そうなのよ。そして、しゃべっているとどっちが年上かわからないようなところがあった、私のほうが下なの。二冊目の歌集「飛行」を作るときに、手伝ったことがあるわ。あれは冬だったけれど、原稿を抱えてやって来て、涙をボロボロ流して「一緒に見てちょうだい。順番もわからない。これはどうかしら、あれはどうかしら」と言うから、私が「それじゃ、この歌は捨てなさい」と言うところから、「いやこの歌は残したい」、「それじゃこの歌は残しな

い」と言うところから、「そんな歌は残したくない」、そんな調子だったんです。そして、最初に書いた「あとがき」を読んだら変だった。「これはいくら何でもおかしい」と言ったら、五回くらい書き直したわね。最後に書いたのを見て、「あ、今度のはいい」って。あのとき、あの人はなぜか本当に自信をなくしていたものだから、自分で歌集をまとめられなかったの。それなのに、「葛原妙子歌集」（三一書房刊 昭49）のとき、私が「この歌はいいから」と言って、本人はいやがったけれど入れさせた歌がはずしてあるんです。

川野——やはり頑固ですねえ（笑）。

森岡——代わりに二十首くらい足してるかな。

川野——ずいぶん足しています。

森岡——私がけなした歌が直されて出ている。一首の歌でも大事なの。私なんか、あ、これ、だめだわと思うと捨てるし、どんな歌だったかも忘れちゃう。でも、彼女は作り損ないのものでも全部残してあるんです。そして、歌を頼まれて、いよいよできないとき、そっちを全部見るのよ。

川野——「橙黄」を改変して異本「橙黄」になったとき、捨てた歌がいっぱい異本のほうに入っていますね。

森岡——あれ、捨てた歌じゃない。新しい歌です。「山川何とか」なんて、みんな新しく作った。

川野——半分くらい作っているんですか。

森岡——とにかく「橙黄」の一冊、バラバラにしちゃった

◇塚本邦雄とのかかわり

の。いい歌に○をつけていって、今の目で見ても、採れない歌は捨てたわけ。代わりに歌を作った。だから、新作よ。すぐわかる。原作の『橙黄』とは違って入っている歌は全部新作。「いくらあなたが見えつ張りだといったって、第一歌集に新作を今の段階になつて入れるのはおかしいし、

そんなの卑怯じゃないの。お母さんやお父さんの挽歌だつて今作った歌なら今からの歌集に入れたほうがいい。そんなの初版本を持つている人が見ればすぐわかるじゃないの。みつともないわよ」と私、言ったの。そうしたら、「いくらあなたの言うことだつて聞きません。私の歌集についてよいなお世話をしないでちょうだいッ」と怒つてね。

川野——『葡萄木立』と『朱霊』（昭45）に、異本『橙黄』を作るときにこぼれた歌が入つていたりするようなので、（この三つは）どうも平行して作つていたような感じがするが。

森岡——そうですね。多いですね。作り損なつた歌を入れたい、塚本が褒めている歌なんてあとから新しく作つた歌、初版が出てしまつて、いろいろなものにも収録されたものを作り直して入れ替へたりしたら、人はおかしいと思うでしょうに。

川野——葛原にとつてもう一人、影響の大きかつた歌人が塚本邦雄です。塚本とのかかわりをご存じですか。

森岡——塚本さんと葛原さんの最初のかかわりは、塚本さんは会社にお入りになつても本を買うので、話によると奥様がずっと洋裁をしていらして助けていらした。ゆとりがあまりなかつたの。それは私たちもわかつていた。ところが、新鋭歌人たちの塚本熱が上がつて来た。塚本さんは東京へ出てそういう人たちと接触したいと思つても、勤めはあるし、なかなか思うに任せない。そうしたら葛原さんが「いいことを思いついた。私、塚本さんを東京へ呼ぼうと思う」と言うの。

当時、留学生のためのアジア会館という施設ができたんです。全部洋式で、ホテルにもなつていて、新しいから部屋がきれいなんです。集会室もあるの。そこで「女人短歌」の編集会をやつたことがあるんです。そのとき、あの人はあんまり帯をきつく締めてきたので脳貧血を起こしちゃつた。顔が真っ白になつて、大変だということ、みんなで寄つてたかつて帯をほどいて、並べた椅子の上に寝かせたの。ご主人を呼びましたよ。その晩一晩、そこへ泊まつたんです。そういう経験をしたものだから、あそこは手頃で、ベッドもいいということで、「塚本さんを土日にか

けて呼んで、アジア会館で塚本さんと三人でいろいろしゃべろう。でも、土曜一日で私たちは引き下がって、あとの日曜日は若い人のグループのところに自由に行つてもらつて、お帰りたいだくことにしよう」というわけ。ホテルをとつて、切符を送つたら、塚本はとても喜んで来ました。

葛原さんからは「あなたも一緒に行つてしゃべるのよ」と言われたけれど、私はいやだと言つたの。「あなたが塚本さんの歌がいいと思つて、そういうことをするのはいいことだと思ふけれど、それに便乗して私が一緒にしゃべつたりするのはおかしいでしょ。あなたは塚本さんと話をしたいが忙しくて行けないから、切符を送つて、宿をとつて、こちらに呼んだ。そういうことならどこでも通るから、そうしなさい」と言つたの。それで、私は行かなかつた。そういうことがあつたのは二回までは知つている。一回ではなかつたと思ひますよ。

川野——それはいつごろですか。

森岡——まだ早いころだけれど、私が『未知』を出したころより後だわ。昭和三十年代でしょうね。アジア会館ができた一年くらい後じゃないかと思ふけれど。

川野——塚本は、当初は批判的でしたが、『朱霊』以降、非常に深い理解者になつていきますね。塚本と葛原とはもちろん文学的に刺激し合つていたでしょうが、個人的に気が合うというのか話が合うんでしょうか。

森岡——どんな話をしたかは知らない。聞かなかつたから。「森岡さんも来ればよかったのに」と言つていたけれど。ま、それで塚本さんは葛原さんとはそういうことで親しくなられたわね。あの人は「つかさん」と呼んでいたわ。塚本さんの才能を非常に買つていた。だからこそ、呼んだのだと思う。土曜日一日か半日、おしゃべりして、その晩と日曜日は好きなほうにいらつしやつてくださいということ自分で自分は引いちゃつた。それはきれいなやり方でした。あの人はそれだけゆとりがあつたわけだから、よかつたと思ひます。

川野——前衛短歌と葛原は違ふと思ふんですけれど。

森岡——葛原さんは自分が前衛だと思つてないですよ。

「森岡さんと私は前衛歌人だなんて叩かれていたけれど、けしからん。何も前衛でないわよね」と言つてました。

川野——葛原自身、ずっとそう主張してますね。だけど塚本とは親しかつたんですか。

森岡——そういうことが契機で、いろいろなことがあつたけれど、塚本さん自身が葛原さんの歌は買つていた。だけれど、葛原さん個人の「人間」にはやはりびつくり仰天したようなところがあつて、人間的な親しさとかつながらというのとはちよつと違つたと思う。もつともあの人に対しては他の歌人もそうなの。あんまり大きいでしょう。何しろ、頭の上に髪を玉にしたのが載つているし。近藤芳美さんよ

り高くなってしまうのだから。

◇三つのカツラ

川野——では、そのカツラの話を是非お願いします。

森岡——（さつき話した軽井沢のことⅡ7月号掲載）五島さんが一緒に泊まった晩、自分の小さいころの話をしておんおん泣いたの。お父様は葛原さんが小さいころ離婚しているわけ。葛原さんのお兄さんは父親の手元に引き取られ、お母さんは一人になり、葛原さんは親戚に預けられた。東京から呼び戻しが来ないし、もうつまらなくて、トボンとした子だったらしいと自分でも言っていました。そこでは怒られどおしで、頭をビシャビシャ叩かれたんですって。「だから、私、ここがベチャンコになっちゃった」と言うから、「そんなことないわよ。頭蓋骨なんてはじめからそういうなのよ」と言うのと、「いいえッ、違います」って、自分でそこが丸みを帯びてないと信じ込んでいるの。それをカバーするためには髪を高くしてここに載せなきゃならないと言う。小学校五年生のときにお父さんが迎えに来た、その翌年、（関東大）震災に遭ったと言っていたわね。だから、再婚なさったお父さんは忘れていたわけじゃなくて、ちゃんと養育費は送ってらしたんでしょうけれど、そのおうちの人が葛原さんを可愛がらなかった。（軽井沢で）

そんなことを滂沱の涙を流しながら話すのです。五島さんはびっくり仰天したような顔をして聞いていて、私は「そんな泣いた話をしてもしようがない。せつかく三人いるんだから歌の話でもするかと思ったのに」なんて思っていたけれど、葛原さんは泣きながら話をしました。そんなことから、頭の上に（カツラを）載せることにしたんです。

川野——カツラを逆に被ったとか。

森岡——後ろ向きに被って見たらとても格好が良かったから、そうしたんですって。三越のカツラ部ですてきなカツラに巡り合った、これなら言うことないって、結局、三つ買ったんですって。一つはよそ行き。一つは昼間。一つは夜、寝るとき（笑）。ふだんは家で夜も被っているの。あれ、頭が蒸れて良くなかったかもね。病気になるってからカツラなんてとられたけど、髪はふさふさとして良かった。両側に分けて、お下げにして編んでいました。とても良かったですよ。だから、頭がベチャンコでも何でもないの。

◇「石畳」に対抗して大田区短歌連盟を結成

川野——猪熊葉子さんの「わが最終講義」に葛原と御主人との関係があまり良くなかったことがちょっと書いてありますが。

森岡——それはお金をどんどん使ったから。ご主人はわり

あいと儉約家できつちりしている。それが、葛原さんが「をがたま」を始めたでしょう。表紙に凝ったりして、どんだんお金を使う。そのお金はどうしたかというとお父さんの遺品の絵をお売りになったんです。

川野——横山大観の絵だとか。

森岡——そう。そんなにお金になるとは思わなかったんだけれど。そのお金をこれはもう自分で使っちゃおうと思った。だから、タッタッタッタ使ったんだけど、ご主人はまじめな人だからハラハラして、「あの人、何をやる気だ」というわけ。雑誌の費用に見合う会費も取らずにきれいな本を次々と出したり、何でも買ったりなさるので、注意をしたの。「そんなむだなことに使うなんて」と。そうしたら、「私のお金を使っているのに何を文句を言うのよ」ということで、ケンカが続いたの。「主人がぶった」と言つて、わんわん泣いて電話をかけて来たこともある。それと、葛原さんが歌を作っていることもご主人の氣に入らなかった。夜中は起きているのに昼間はグーグー寝ているでしょ。

川野——「女人短歌」に入つた、かなり最初のころからです。それまではすごくいい主婦であり母親であつたのに、歌に対する意欲が強くなつてきたころから、いいお母さんとか主婦をやめようと本人が意識しておられたような。

森岡——でも、初めのころはさほどではなかった。お孫さ

んが生まれたころはもう歌に一生懸命でしたけれど（のめり込んでいたわけではなかった）。「原牛」が出た後くらいから少しずつ、あまりよくはなかったわね。

私が「ポトナム」をやめるとき、（阿部静枝さんから）「森岡さん、『ポトナム』の人を引っ張つていつて雑誌を出す気でしょ」と言われたけれど、そんな計画はなかったの。それから十二、三年経つて、私が歌を見ていた人たちが「先生、雑誌を出しませんか」と言うから、「雑誌を出すつて大変なことよ」と言つたんです。そうしたら、どうでしょう。みんなに触れ回つてカンバを集めたんです。私は全然知らなかった。代表がそのお金を持って来て、「これだけカンバが集まりました。どうぞ雑誌を出してください」つて。それは一年分あつたの。びっくりして、「よくこんなお金を集めたわね」と言つたら、私が雑誌を出す氣配がないから、一年分くらいの会費を集めて持つて行こうということになつたんですつて。それで「石畳」を出したのよ（昭43）。

私は雑誌を出す氣がないつてことは葛原妙子は知つていた。それが突然出たでしょう。もうカーツとなつて、「あな、私に内緒で、相談もしないで、どうして雑誌を出したの」と言うから、「私は出さないと言つていたんだけど、そういうことでやむを得ず出すことに踏み切つた。でも、これは私の自由だから、あなたにあらかじめご相談す

るも何もないでしょ」と言ったら、怒ってねえ。同人雑誌「灰皿」創刊（昭32）のときは「女は私一人だから葛原さんと斎藤史を入れてちょうだい」とちゃんと葛原さんと呼んでいるの。でも、「石畳」のときは何も葛原さんの了解を得ることはないし、突然そういうことになって私も慌てたくらいだから言わなかったの。そうしたら、水臭いというわけよ。

そして、翌月（十一月）すぐ、大田区短歌連盟を作って自分が会長になった（笑）。葛原さんの家を事務所にし、大田区に住んでいた岡部桂一郎さんに副会長を頼み、芸能の渡辺プロの社長、渡辺晋のお父様が区議会議員をしてらして、歌人でもあったから、その人も入れた。それでスタッフを固めた。それで岡部さんと親しくなるんです。

◇歌から離れて得た平安

川野——亡くなる前後のことをお聞きしたいのですが。どういうふうに葛原が歌と離れていったのかなど。

森岡——秋、突然、目が見えなくなつたの。「私、目が見えない」と言つて一週間くらい全く見えなかつたんです。そのとき半狂乱になつていた。「葛原さんがおかしい」と知らせて来た人がいてね。私は知らなかつたの。

いえ、その前にちよつとおかしいと思つたことがあつて

ね。しばらく電話がかかつて来ないのよ。あの人も面倒臭くなくて電話もかける気がしなくなつたんだわと思つていたら、七月ごろ、かかつて来た電話での様子が変なの。もう、なんていうスピードでしょうね、その話し方が異常なのよ。「森岡さんですか。今日は寒いですね。どこどこへ行きましょう」って抑揚もなくトットトットトットトットと早口で言うの。「あなた、ペラペラとものを言っているけれどどうしたの」と尋ねたら、「あら、もつと早く言えます。ペラペラペラペラ」だから、私はびっくりして電話を切つて、すぐに車を拾つて葛原さんの家に行ったわけ。大森まで二十分とかからない。

玄関のベルを鳴らしたら葛原さんが出て来た。そして「まあ、森岡さん、どうしたの、急に来たりして」と言う。そのときは普通。「あなた、さつき電話をかけてきたですよ。何ですか、あの電話は。ペラペラペラペラとあれだけよく口が回るといふくらいおかしかつたから、あなたが変になつたんだと思つて電話を切つてすぐ車に乗つて来たのよ」と言つたら、涙を流して「ああ、うれしいわ。私のことをそんなに心配してくれたの」と言っているところへご主人が出て来たので、涙の顔をパツと向けて「あなた、森岡さんは私の電話が早口でおかしかつたといつてすぐに飛んで来てくださったんですよ。それなのにうちの者はみんな、なんて不親切なんですよ」と言つたんです。ご主人

が変な顔をしてたわ。私も困ってね。

川野——葛原が亡くなる前はすっかり歌を忘れていたそうです。

森岡——そうよ。目が見えなくなったでしょ。一週間くらいして見えるようになったときは、もう全然（わからな）。歌の部分の脳みそだけが水になったんだわね。他は水にならない。変だというので面会謝絶にした。だれが行ってもご主人が出て来て追い返されるというから、「じゃ、私が行ってみよう」ということで行ったんです。目が変になったのが初秋だったから、十月くらいになつてからかな行ったら、ご主人が「ああ、森岡さんか。森岡さんじゃ、しようがない。お上がりください」って、入れてくださった。他の人はだれも会えなかったけれど。

葛原さんは「あら、森岡さん」と言うのよ。あら、わかるじゃないのと思った。話をしていても普通なの。「森岡さん、新聞で見ましたら、俳人の柴田白葉女さんが殺されたんですって。あの方、私、存じ上げておりました」と言うから、「何言ってるのよ。私も知ってるわ。二人で会ったじゃないの」と言ったら、「あら、そうでございませるか」なんて、言い方がよそよそしいのよ。「他に新聞で何を読んだの」と聞いたら、「今年は風が荒れて軽井沢のプリンスホテルの木がみんな倒れたんだって」と言っているの。そういうことも覚えているのね。だから、「軽井沢の

ことは覚えてるでしょ。いい木が見えるからって、軽井沢の家の壁を削り貫いたりしたでしょ。覚えてない？」と聞いたら、「知らない」と言うの。夏には軽井沢に行つて歌をたくさん作ったり、たいへんな軽井沢党だったのに、おかしいなと思つたので、「あなた、歌集を出したのを覚えてる」と聞いたら、「いいえ。私、歌集なんて知りません」というわけ。ご主人に「いつもこんなふうですか」と尋ねたら、「そうなんですよ」って。

それで、ご主人に歌集を持つて来てもらったんです。「鷹の井戸」（昭52）でした。「これ、あなたの歌集だけれど、わかる？」と聞いたら、クズハラ、タカノイドってちゃんと読めるの。帯に大きく第八歌集と書いてあるんです。「森岡さん、私は八冊、歌集を出しているの」と聞くから、そうよと答えたら、へーえなんて言つて、他人事みたい。字が書けるかと聞いたら、「書けると思ふけれど書けないかもしれない」と言うから、その歌集に「妙子」とサインをしてもらつたんです。あの人、いつも「妙」の字の女偏が小さくてランプのダイヤみたいなんですが、やっぱりその字よ。そして、「少」はいつものように大きいんです。だから、手は覚えてるのね。「あなた、ちゃんと書けるわね」と言ったら、オホホホなんて笑っているの。しゃべっていると普通なんだけれど短歌の過去がない。それなのに私がわかるというのもおかしいでしょ。

亡くなる年の六月に一度、仮死状態になるくらい悪くなったの。そのときに猪熊さんがカトリックの洗礼を受けさせたけれど、あの人は「うちじゅうの者は、娘たちはみんなカトリックだけれど、私は信仰には入りません。罪が深くて歌人でございますから」と言っていたの。御家族のお気持ちでしょうね。

川野——歌を忘れちゃってからカトリックにも入り、そしてまた家族とも和解していくわけですね。それまで「歌の鬼」というんですか、ずーっといろいろなものど軋轢（えんりく）を持ってやってきたのに。

森岡——あんなに歌に憑かれた人は見たことがない。私などはあんなに憑かれないわね、どこか醒めていて。だけど、あの人は本当に歌に憑かれていた。

川野——搔卷（かきまき）を被っている姿、そのままですね。

森岡——そう。蛇（へび）がとぐろを巻いているようだった。

川野——すごく象徴的な姿ですね。歌を忘れたときに日常の穏やかな生活に戻ってくるという一生は感動的です。

◇真つ赤な花で飾られたお葬式

森岡——死後のことを話すと、亡くなったのが（昭和六十年）九月でしょ。お葬式で私は弔辞（ひょうじ）を読んだの。

中井英夫は葛原さんの歌をずいぶん買っていたの。でも、

お葬式に見えないのよ。三日くらい経ってから電話が入ったの。「森岡さん、あなたがついでいながらあの葬式は何ですかッ」と怒鳴っている。だから、「私がせっかく弔辞（ひょうじ）を読んだのに、あなたはいなかったでしょ。来るべきだと思っていたのに来なかったわね」と言ったら、「あの花は何ですッ」と言う。御長女はちようど海外に行ってらして下のお嬢さんたち二人が、お母さんは派手なことが好きだったから、お葬式の花は全部赤にしましょうということで、真つ赤な花ばかり。ピンクがちよつとあつたけど。花輪（はなわ）が全部赤なのよ。

川野——いかにも葛原らしい（笑）。

森岡——葛原らしいけれど、あの人は死んでるんだから。典子ちゃん（中井典子）は私に「おばさま、赤くていいでしょ。うちの母は派手だったから白い花なんていやがると思つて、全部赤にしました」と言っているんです。それが中井英夫の目に入つた。喪場（さうじやう）でカーッと怒りが湧いてきて飛び出したんですつて。中井は葛原妙子の歌を女流（にょりゅう）の中では一番買っていたでしょう。それが「何ですか、森岡さん。あなたがついでいながら、なんであんな赤い花にしたのかッ」と、もうその見幕（みまく）のすごいこと。「あれはご遺族（ごいそく）の意向（きやう）なんだから、そんなことしちやいけませんなんて、いくら私が親しかったからって言えるはずがないでしょ」と答えたら、「言つたらよかった」と言い返すんですよ。

焼き場へ行くと、岡部桂一郎さんのご夫婦が一緒だった。車に三人、座っていたら、大きな声で岡部さんが、「ねえ、森岡さん。歌壇も葛原妙子みたいな女流がいなくなつて寂しいねえ。とにかく女流歌人で猥談をする人つてあの人だけだったよ。もう残念だ」つて。葛原さんにはそういうところがあったのね。私にはあまり言わなかったけれど。

川野——それは聞き逃していました。葛原はわりと陽気でおもしろい人でもあったようです。歌にはあまりそれが滲んでいないのですが。そういえば「割れ目の研究」という奇妙な好奇心のうかがえる歌もありました。

森岡——（例によつて）夜中に電話がかかつてきて、『芸術新潮』の今月号を買いなさいよ、と言うから、何だろうと思つたら、「割れ目の研究」という題なんですつて。例えば古い石造建物に入つたヒビ、立ち木が風で折れたときの割れ目、割れ目の切断面とか、いろいろな割れ目だけを写真に撮つて、集めた一冊だったらしい。珍しいでしょ。そういう本があつたら歌のタネになりそう。「意味が深いじゃないの、割れ目の研究つて。私、これで歌のヒントがずいぶんできた」つて。それに惚れ込んだやつて、「これ、いいわよ」と何回も言つてましたね。

川野——ええ、確かに。葛原は割れ目から向こうを覗くのが好きですよ。（覗いていると）何か出て来たり。

森岡——あの人、写真からもずいぶん歌を作りましたよ。だから、「芸術新潮」は大好きで、ずっと取つていた。あれから啓発されたのね。「あなたは絵も見ないで作ろうというからだめのよ。ああいうのは刺激になつて、イメージがどんどん湧くのよ」と言つてた。私はただ割れ目なんか見ても何ともなかったけれど（笑）。

川野——そういえば養老院が焼けて、老女がたくさん亡くなったときの話もおもしろいですね。

森岡——そう、そう。「たいへん、たいへん」つて電話をかけてきたんです。養老院が焼けて老女が何人も死んだんですつて。「新聞には老婆と書いてある。どうして、老女つて書かないのかしら。老婆が何十人も死んでいるなんて気持ちが悪いじゃないの。私、いやだわ」と、えらい怒りようだった。それにかかわる歌があると思う。

川野——『薔薇窓』の中の「母系」の一連に入っています。グロテスクなところは全部省いてきれいな一連になっているんですけど、「老婆が何十人」とあるのを見て作つたんでしょうね。

森岡——ショックだったのよ、きつと。老婆という言葉と人数とが。

川野——きょうは貴重なお話をありがとうございました。

※訂正 7月号101ページ下段12行め「京都市全部の人口」は「京都市伏見区の人口」の誤りでした。訂正し、お詫び申し上げます。